愛媛資料ネット会報　第１１号　２００７年１０月２６日

編集・発行　芸予地震被災資料救出ネットワーク愛媛（愛媛資料ネット）
〒 790-8577　松山市文京町３　愛媛大学法文学部寺内研究室気付
TEL　089-927-9317　E ﾒｰﾙ terauchi@LL.ehime-u.ac.jp　郵便振替 01690-8-5497

今治　満願寺の角筆文献

西村　浩子

1.角筆文献とは

「角筆文献」と呼ばれる史料をご覧になったことがあるだろうか。

角筆文献とは、くぼみの文字が書き込まれた文献の総称である。くぼみの文字とは、墨や朱の色は全く使わず、割り箸の先を尖らせたようなもので筆圧を利用し、紙面をくぼませて書いた文字である。この割り箸状の筆記具を「角筆（かくひつ）」と呼び、それで書かれた文字を「角筆文字」、そのような文字のある文献を「角筆文献」と呼んでいるのである。

このような角筆文献として多く発見されているのは、江戸時代から明治初期にかけての、大学・中庸・論語・孟子等の四書五経の類である。その中でも、特に漢文を学ぶ初学者がテキストとして使ったものに多く書き入れられている。全国４７都道府県のすべてに存在し、3200 点以上の角筆文献が発見されている。近年、日本だけでなく、韓国・中国・スイスからもくぼみの文字や記号を書き入れた文献が発見され、注目されている。

さて、日本で発見された角筆文献の書き入れの内容は、漢字の読み方が中心である。以下に、今治の満願寺の史料から角筆文字の例をご紹介する。

この史料は、「続遍照発揮性霊集補闕鈔　巻第八」である。

次頁の写真１は、「滋」の右横に、「ゲシ」と見えるが、これは、「シゲシ」と読むことを表す。「ゲ」の濁点は、朱筆で付け加えられており、「ケシ」はもともと付刻されている。注意深く見ると、「ゲシ」の上部にクボミで「シ」とあるのがおわかりになるだろうか。

これは、角筆で「シ」を書き入れて、「ゲシ」と合わせて「シゲシ」と読むことがわかるようにしたのだろう。（朱筆との前後関係は、他の箇所の例を見ると、角筆の文字の上に朱筆の文字が乗っていることから、朱筆は角

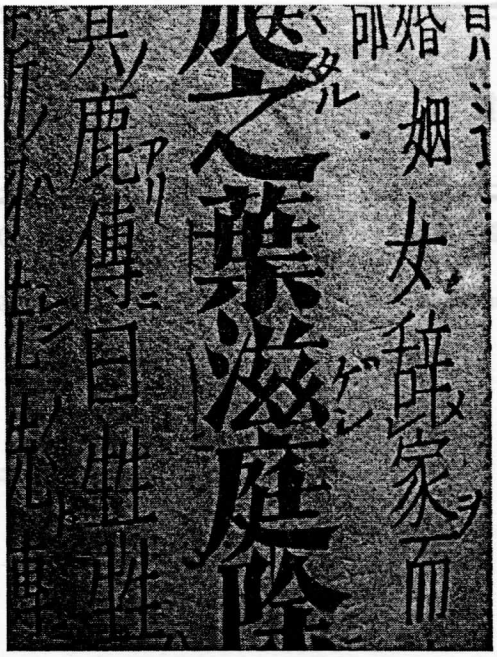


写真１

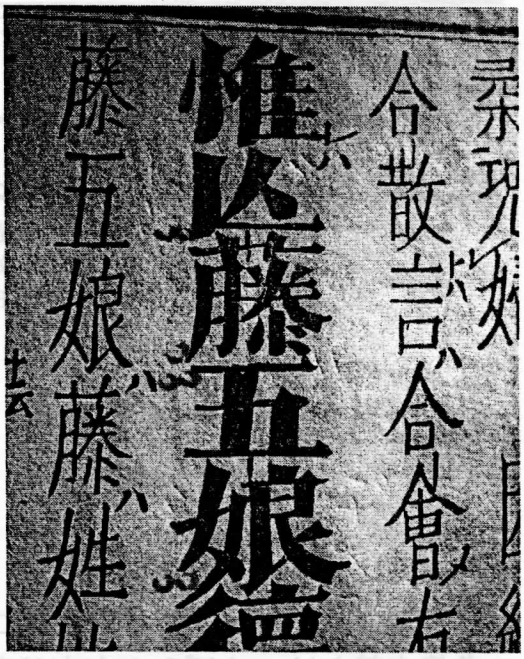


写真２

筆の後に書き入れられたことがわかる。)

また、写真２は、漢字の左右に濁点の記号や文字が書き込まれている。大きな文字列の上から２文字目「凶」の左横に、角筆文字で「ホウ」とあり、右肩にも濁点の記号が見える。これは、この漢字の読み方が「ボウ」であることを示している。続いて、「五娘」の「五」の右肩および「娘」の左肩に濁点の記号がある。「娘」の右横には「ヂヤウ」という文字が見え、「五娘」は「ゴジョー」と発音するのだということがわかる。

このように、角筆で書かれる文字は、漢字の読み方の一部を書き、時には記号も含めて、どう発音するかを示す役割がある。

このような角筆文字が書き入れられた角筆文献として、四書五経以外にも、史記・古文真宝・文選・などの漢籍、三体詩・唐詩などの漢詩、近思録・日本外史・靖献遺言などの歴史書、法華経・金剛般若経などの経典類がある。

２.満願寺で確認された角筆文献

これまでの調査で見つかった満願寺の角筆文献は、以下の通りである。史料名、出版年、所在、朱印や墨書の情報を掲げる。

1) 性霊集抄　巻四之下・巻八之下　慶安２（1649）年版（本箱Ａ 14、Ａ 15）
　角筆文字の上に墨書き。

2) 孟子　巻之七　　（本箱Ａ 24）

表紙見返し墨書「神野氏」・「豫州西條御会内／朝来伝□／秀顕」

3) 礼記　巻之二　　（本箱Ａ 28）

表紙墨書「栄運」・表紙見返し墨書「剛宝□（梵字）龍」

4) 改正音訓五経　　文化９（1812）年再刻（本箱Ａ 29）

朱印「越智郡／無量寺」

5) 論語　巻之八－巻之十　　（本箱Ａ 60）

中表紙墨書「論語巻之八／朝倉下村／満町／武田吉右衛門」

中表紙裏墨書「朝倉下本満町武田愛次郎□」

角筆文字の上に墨書き。

6) 天学初徴　　萬延元（1860）年版（本箱Ｃ 6）

墨書「五ケ寺中蔵」（１丁表）。角筆の点や線。

7) 新版訂正　論語　道春点三　　（本箱Ｄ 2）

表紙見返し墨書「□井　宮松」

8) 六物図依釈　巻一二　　元禄八（1695）年（本箱Ｄ 10）

表紙墨書「沙門恭瑜」

9) 続遍照発揮性霊集補闕鈔　巻第九　慶安 2（1649）年版　（本箱Ｄ 18・Ｄ 20）

表紙墨書「満願寺什物／宇／共十七」

10) 遍照発揮性霊集　巻五・巻七（本箱Ｆ 20・Ｆ 21）

表紙墨書「智円之」・表紙見返し墨書「満願寺恭周上人求」

11) 改正音訓書経　再刻後藤点　地　　文化９（1812）年　（本箱Ｉ 27）

朱印「伊予国府中／満願寺蔵本」

12) 改正音訓易経　再刻後藤点　乾　　文化９（1812）年　（本箱Ｉ 28）

13) 杜律五言集解　（本箱 F18）

朱印「伊予国府中／満願寺蔵本」

14) 増註唐賢絶句三体詩法巻之一（本箱 F19）

表紙墨書「秀映之／武田折就」

15) 続遍照発揮性霊集補闕鈔　巻第八　慶安２（1649）年版か　（本箱Ｉ 26）

朱筆の下に角筆文字あり。（上記の写真１・２）

16) 九條錫杖抄　上下　　（本箱Ｉ３・Ｉ４）

朱印「伊予国府中／満願寺蔵本」・表紙墨書「満願寺什物」「宇共二」「共二」

17) 改正音訓礼記　再刻後藤点　　（本箱Ｉ７）

18) 性霊集鈔　慶安２（1649）年　（本箱Ｉ３・Ｉ４）

以上の 18 点が満願寺で確認された角筆文献である。今後の調査で、経典類からも角筆文献が発見される可能性が高い。

また、弘法大師著作の「遍照発揮性霊集」に関係する文献に角筆の書き入れがあることから、弘法大師関係の書物が地域の寺々でどのように読まれたかをさぐる具体的史料になると思われる。これまで「性霊集」関係の角筆文献として報告されているのは、岡山県邑久郡邑久町の朝日寺、徳島県美馬郡貞光町の東福寺、徳島県美馬郡美馬町の願勝寺、京都の石山寺等のものである。それぞれの寺の角筆文献を比較検討することも可能ではないかと思われる。

3.角筆文字が書かれる理油

これまでの調査研究から、漢字の読みを示す際に、どうして見えにくい角筆文字を書き入れるのか、幾つかの理油が考えられている。

一つには、「素読」という学習形態に関係しているという説がある。素読は、江戸時代、寺子屋や藩校での行なわれた漢籍学習の形式で、意味内容を考えることなく、ただ文字だけを音読することである。このときに、師匠の読む発音をこっそり書き入れ、書き入れたことを師匠に見つからぬようにしていたのではないか、という説である。いわゆるカンニング説である。

また、別の説は、師匠の音読を聞いて漢字の読みを角筆で書き入れておき、講義の後改めて墨や朱で書き入れる備忘のためではないか、という考え方もある。

あるいは、筆を使っていては書き入れる時間が足りないので、鉛筆のようにすばやく書けるもので目立たないように書いておき、後でゆっくり墨や朱で書き入れたからではないか、という考え方もある。貴重な本を大切に使うということでもある。

現在のところ、どうして角筆で書き入れられたかは、明確な結論は出ていないが、これまで発見された角筆文献の多くが漢籍の素読のテキストとして用いられたものが多いことから、素読の場面と関係があることは間違いないようである。

満願寺の角筆文献については、どの説にあたるのか現時点では不明である。

4．角筆文献を見つける方法

（1）自然光を利用する

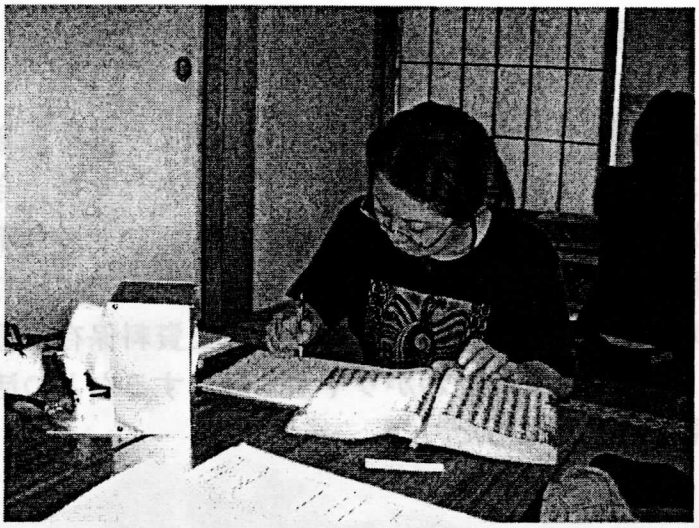
この写真のように、窓際で、本の紙面が光線に対して斜めになるようにし、いろいろ角度を調節してみると、くぼみの文字が光に反射して、きらりと光る。

蛍光灯や直接の太陽光は、あまり適さない。午前１１時ごろから午後３時ごろまでの間が見つけやすい。

（２）懐中電灯や角筆スコープを使う

懐中電灯で紙面の斜め上あたりから照らし、文字列に沿って動かしていくとよい。

角筆スコープは、一般に市販されていないので、手に入れるのが難しいが、窓のない暗い室内での調査に適している。角筆スコープは、赤外線が出ないようにしているため貴重書の調査や、机の上に本を置いて調書を取りながら作業する時に向いている。



5.古文書・明治期の教科書にも存在する角筆文字

角筆で書かれた文字は、漢籍の版本や経典類だけに存在するのではない。江戸時代の古文書や明治期の教科書からも見つかっている。

1）古文書の例

これまでに確認した例としては、上浮穴郡久万高原町大川土居家の弘化 5（1848）年書写の久万山村の「諸役定法場寄帳」、文化 3（1808）年写の「上黒岩　大川　両村御用日記」、明治 5（1872）年写の「戸籍御用日記」などがある。これらには、地名を表す漢字や仮名、斜線などが書き込まれている。

2）教科書の例

「小学読本」明治 8（1875）年版、「簡易読本」明治 20（1887）年版、「新体読方書」明治 20（1887）年版、「訂正帝国読本」明治 25（1892）年版、「小学国史」明治 33（1900）年版などに、漢字の読み方がひらがなまたは片仮名で書き込まれている。

このように、角筆文献は、いろいろな場面で用いられた史料から発見できる。特に、古文書にも角筆文字があるとなると、調査の際に、墨書き以外にくぼみの書き込みがないかどうかも確認する必要があるだろう。その意味で、角筆文献の存在は、これまでの学問研究の諸分野に、もう一度資料を見直しを促すものであると思う。

日本語研究の立場からも、書き込まれた漢字の読み方と方言音との関係、学習形態・学習者とのかかわりをさらに考えていかなくてはならない。

今後、まずは、満願寺の調査を進め、その角筆文献の全体像を把握できればと思っている。

愛媛資料ネット総会を開催

本年度の愛媛資料ネット総会が６月２日（土）に愛媛大学法文学部中会議室で開催されました。総会では、昨年度の活動、会計報告が了承された後、今年度の活動方針として、従来からの資料調査・整理活動を継続すること、今年度も歴史懇話会を継続して開催することなどが確認されました。また、城川町文書館や今治史談会の活動状況が報告されました。この他、歴史資料保存の重要性を理解してもらうために、整理した資料をわかりやすく展示するなどの活動が必要ではないかなどの意見が出されました。

会計報告(2006・4・1 ～ 2007・3・31)

収入	募　金	１９１，０００
	利　子	２
	前年度繰越金	３７１，２２８
	計	５６２，２３０

支出	発送費	３３，０４０
	交通費	４，０００
	その他	３、０８７
	５周年記録集印刷費	１４９，９４０
	次年度繰越金	３７２，１６３
	計	５６２，２３０

本年度の委員は以下の通りです。
代表：武智利博、内田九州男
委員：川岡勉、川東竫弘、近藤福太郎、島津豊幸、白石通弘、徳永高志、永井紀之、西尾和美、松原弘宣、村上正郎、森正史、森正康、矢野達雄
事務局長：寺内浩

芸予地震被災資料救出ネットワーク愛媛　申し合わせ事項

１、(目的)
①災害発生時に文化財・歴史資料の救出保全活動を行うこと。
②県内にある文化財・歴史資料の調査を行い、それらの防災及び地域史研究への利用に資すること。
２、(会員)
本会の趣旨に賛同する者は会員になることができる。
３、(役員)
役員として、代表・委員・事務局長を置く。
代表は本会を代表して会の運営にあたる。ただし、重要な案件が生じた時は委員会あるいは総会に諮るものとする。
４、(会計)
本会の経費は、当面は募金によるものとし、会費は徴収しない。

調査・整理活動、その他

◆松山東雲女子大学の西村浩子先生に満願寺の角筆文献について文章を寄せていただきました。

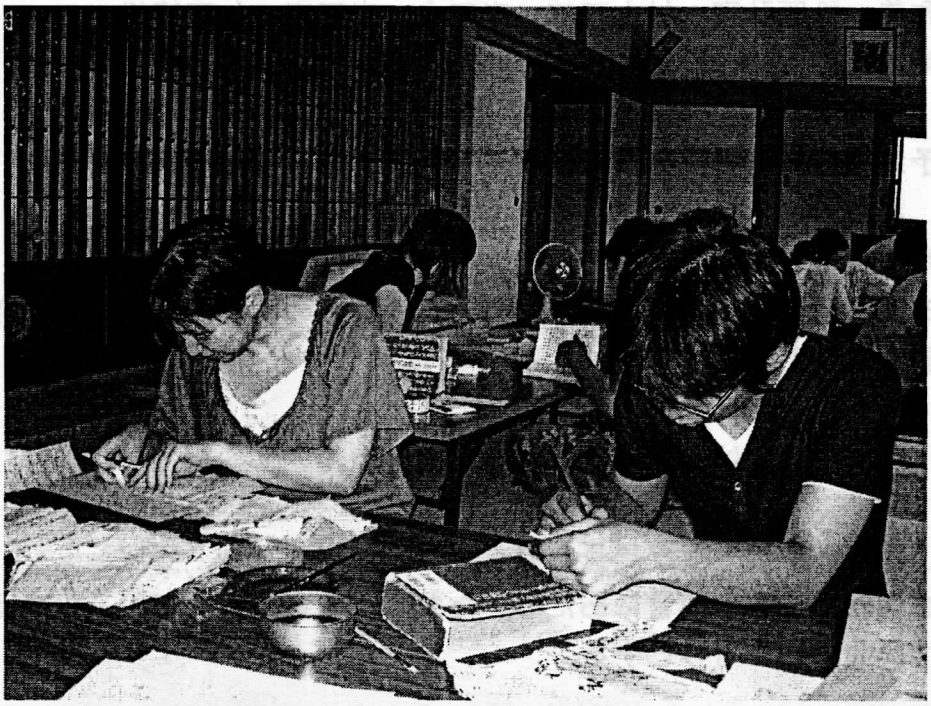
◆６月に愛媛資料ネット総会及び第４回史料懇話会を開催しました。

◆７月に旧朝倉村満願寺で愛媛大学の教員・学生が朝倉村史談会の方々の協力を得て資料の整理作業を行いました。

◆今年度の愛媛資料ネットの活動には、愛媛大学地域創成研究センターの研究活動補助費が使用されています。

愛媛資料ネット活動日誌

・６月２日
　愛媛大学で第４回史料懇話会（１３名）
　愛媛大学で愛媛資料ネットの総会開催（１９名）

・７月１５日
　旧朝倉村満願寺で資料整理（３１名）

・７月１７日
　松山市古三津で資料調査、大学へ資料搬出（１名）